おごせ教育 Pick up

越生小学校

1月21日（水）に、6年生が社会科見学で国会議事堂と科学技術館に行きました。社会科の授業で学習した政治に関することを、実際の場所に行って学習することができました。また、科学技術館では、たくさんの展示物や体験コーナーを通して、科学をより身近に感じることができました。

梅園小学校

1月13日（火）に、ときがわ町にあります、上サ・スケート場（天然スケートリンク）をお借りして5、6年生がスケート教室を実施しました。5年生は、ほとんどの児童が初体験でしたが、徐々に慣れていきました。6年生は、昨年度の経験を生かし、5年生に教える姿が見られました。

越生中学校

3年生が、越生町社会福祉協議会の皆様のご協力のもと、福祉体験学習を行いました。手話・車イス・アイマスク体験や、盲導犬とともに生活する方からのご講演をいただき、福祉に対する理解を深めました。

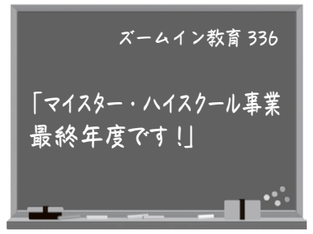
おごせっ子広場

町内の小中学校や町の行事等に参加するこどもたちを写真で紹介するコーナーです。

清和学園高等学校は二〇〇四年に開校した単位制・通信制の高等学校です。自動車科と調理科と普通科があり、通信制で専門学科（自動車・調理）を持つ学校は全国に唯一という特徴ある学校です。

令和五年度に文部科学省からマイスター・ハイスクール事業の指定を受け今年で三年目です。この事業は生徒達が越生町の皆さまをはじめ、企業・大学・専門学校など多くの方々と協働し、最新の知識や技術を学び、生徒のアイデアで町の抱える課題の解決を目指し、産業人材としての力を身に付けていく取り組みです。一つ挙げますと、今年もバレンタインチョコを、越生町の特産品である梅・柚子を使用して作り販売しました。

産業祭での調理部の出店と自動車科のゼロカーボンについてのパネル展示、軽音楽部の演奏、越辺川掃除・灯籠流しへの協力、越生こども未来大学の授業、パークゴルフ場の整備活動などに生徒達は参加させていただきました。校内では今年度から十一月十三日に第一回文化祭を開催することができました。これからも色々な面で町との連携を深めていきたいと思っていますので今後とも宜しくお願い致します。



越生浪漫 No.205

眠柳「梅花の別乾坤」(下)

●梅花の別乾坤　下

眠柳

「東京朝日新聞」明治32年（1899）2月15日
『朝日新聞〈復刻版〉・明治編』
城西大学図書館所蔵より

ゆき〳〵て梅園村ハ既に半にも達し候へども其名を負へる梅ハ一株も無之況や又暗香の人を襲ひさうにも仕らず唯普通の農家や萬屋や或ハ又料理屋を兼ねたる旅舍の店頭に達摩とやらん稱する娘等誰娘等何が妖粧盛飾して村内の若者を唆へ込み月琴を鳴らし三絃を弾きつゝ、狐媚を售り猫諛を鬻ぐに過ぎ申さず前賢稱するところの孤山の勝も恐らくハ同日を以て語り難かるべしとまでに豫想したりし梅園村とハそも〳〵斯る大俗地にてありつるかと小生も悵然これを久しうたる次第に御座候

斯くて小半丁も進みし後車夫をして梅花のある所を問はせ候處こゝハ梅園の大字津久根と申す村にて梅を以て稱せらるゝハ大字堂山小杉の邊に候よしを誨へ呉れ候道左山腹の菅原神社前を過ぐれバ眼界漸く濶けて家漸く疎に境將漸く俗より雅に入り候されども梅花らしきにハ未だ出會ひ申さず候吁梅園の名ハ遂に虚名に過ぎざる歟

又淙々の一川ありこれハこれ其源を越上山より發する越邊川に御座候中流にハ怪獣の如き巨巖いくつ寒玉の清漣を裁して横はり觸激の聲さながら怒嘯するが如くにも聽かれ候こゝに白堊塗の細く長き一橋を架して『むめぞの橋』と標しあり候是橋や即ち人を堂山小杉の梅の村に通ずるものに有之候

橋上に來りて車を下り且堂山の方を見わたし候へバ茅屋參伍縹渺として梅花爛熳の間に現出し來り候小生の喜悦およそ如何ぞや愁眉ハ忽ち開かれて覺えず手を拍ち膝を拊ち梅園の名の遂に我を欺かざりしを車夫に語りて又車を急がせ申候

いよ〳〵進めバいよ〳〵梅多く農戸田圃相隣りて一村悉く梅花の郷に御在候原來梅園村ハ市町村制實施以來の名のよしにて現今ハ大字何村と稱する附屬のもの八箇村これあり或人『梅さくや梅園村ハ大字』とも吟じ候よし戸數ハ八百八十人口ハ二千五百餘もあるとやら承はり候

小生ハ車を進めて遂に堂山小杉に達し申候西南北の三方ハ幾ん山を以て圍繞せられたる山村に候へバ境ハ東京近郊の梅園に比して差狹き心地いたし候否なに東京近郊の梅園ハ梅園そのものこそ廣からざれ眼界豁然たるが多く候へども此処ハ眺望あまり佳らず候但樹ハ孰れも老て且つ大い候へバ根圍合抱に過ぎたるも少なからず或ハ半身朽ちて花尚繁く著けるものあり或ハ又長條邊川に這出でて龍の水を飲まんするが如きもあり臥して起ちて復臥し又横生し又縱生して鐵枝百出異狀百態擧げて算ふべきにあらず笨拙なる小生の筆ハ到底其髣髴を狀するに足らず候

梅の下に徑あり皆歴觀すべく候小生ハ車夫と偕に虬龍狀の老幹を傴僂して過ぎ香雲の間を彼方此方と逍遙して遂に老樹殊に多く花最も稠き邊に携へたる毛布を鋪き渠と瓢を傾けて一醉いたし候

それよりして同村の建康寺へ車を走らせ申候これハ寺院にして村役場に御座候小生ハ役場に就て梅園村に梅多き由來にても尋ねばやと存じ候にて候あやにく村長殿ハ不在にて役場員ハ大字上谷の小澤清三郎といふ人を紹介して呉れ候依て同氏を訪問いたしところ直に迎へられて種々叮嚀に説示され候坐にハ新年の賀客參り居り勝手にハ餅を搗きき居り候小生が同氏に就て糺し、中にハ梅園村の名所舊蹟等も有之候へども特に記すはどのものハ無き旨答へられ候唯梅園橋より一里十八丁なる顔振峠の山腹に男瀧女瀧鬼瀧と稱する高さ二丈以上の瀧ある事及び城山に大楓ある事等にして梅園の楳林ハ何時頃より植初めたるものにや分明いたさず候由尤も同家の前山俗に琴平山と稱するにハ菅原道實を祈りあり候へバ其等の緣故と及土地の梅に適恰するとを以て漸次繁殖し、ならんと語られ且梅花を觀んとならバ同神社の山に登るべしと勸められ候依て小生ハ同氏が案内せんと言はれしを辭して同家を出で車夫と其山に到り申候

神社の境内に碑あり『神垣の外面ハ梅の林かな』と刻してあり山に登りて回瞻すれバ小澤氏の言に違はず白雲全村を繚繞して眼界又さきの狹小なると似るべくもあらず誠に梅園の梅園たる絶景を現出いたし候小生ハ覺えず快哉を連呼して耿繼去るに忍びかね候へども夕陽已に秩父山の彼方に没し加ふるに夕風樹々の梢を鳴らして寒威凛乎久しく居る可らず候へバ遂に越生町の旅舍へ引返し翌朝再び琴平山に赴むきて幽賞多時つひに歸途に就き申候東京に立歸り候ハ其日の黄昏に御座候而して全村雪の如き梅園村ハ髣髴として尚眼にあり例の好める湯豆腐の色ハ宛かも其色に肖て更に一倍うまく味はれ候

附言　梅樹ハ明治の初年村民縣達を誤解して伐拂ひしを以て現今ハ當時の十分一に過ぎず